
誰も知らないその時間

ちぐ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰も知らないその時間

【コード】

N1498C

【作者名】

ちぐ

【あらすじ】

桐枝は公園のベンチに座っている。ただそれだけ。「PAIN」というお題を頂いて書いたものです。

「だれもしらないその時間」

悲しいとは言わない。

そんな感情に気付かれたくない。

苦しいとは言わない。

プライドが許さない。

公園には冷たい風が吹いていた。

夏が近いとはいえ、もう日が暮れてしまったのだから、当然と言えは当然だ。

半袖のＴシャツから伸びている桐枝の細い腕には、鳥肌がたっていた。

それでもまだここを離れるつもりはない。

見慣れぬ公園は、緑と露のにおいでいっぱいだった。今日は昼間で雨が降っていた。この広い公園も、一面濡れてしまったんだろう。桐枝がここに着いた時にはもう雨は上がっていたが、公園内を埋めるようにに茂っている、とうに花の終わった桜も、色づくには早すぎる銀杏も、深緑の葉に水たまりを乗せていた。

ベンチに腰かけると、まだ濡れていたらしく、真っ黒なズボンの色がまた少し暗くなった。

隣のベンチには中年の男性が座っていた。たぶん帰る家はないのだろう。悲しげな空気をまとっている彼は、相席中の汚い野良猫を優しく撫でていた。

バイブが鳴った。

『もしもし桐枝？ 明日どこで待ち合わせにするー？』

うーん、この前とおんなじトコがいいなー

『あーあの3番出口のとこ?』

うんそうそう。

『おっけー。じゃあ十一時でいい?』

十一時ね。りょーかいつ! じゃ、明日ねー。

『うん、また明日ー』

ケータイを閉じて数秒すると、サブディスプレイから明かりが消えた。

隣のベンチに座っている彼は相変わらず猫をなぶっていて、桐枝の声がなくなつた公園には再び静けさが戻ってきていた。

見上げた夜空には深い色の雲が漂い、その隙間からは星のない藍色が覗いていた。

多分明日には、桐枝は鮮やかな色の服を纏い、乾いたアスファルトの上を友人と共に踏みつけていくだろう。

何百、もしかしたら何千という人とすれ違い、横隔膜を揺らして高い笑い声をあげるのだろう。

それでも彼女は思っている。

誰か

私の爪が黒く染まっていることに気がついて

いつもより大きな音で音楽を聞いていることに気がついて

桐枝はベンチから立ち上がり、あかるくかがやく駅へと向かって歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1498c/>

誰も知らないその時間

2010年12月10日07時24分発行